

# 宗教歌の演奏について

## ～メンデルスゾーンの讃美歌に着目して～

ガハプカ 奈美

### はじめに

本稿では、宗教歌の中でも讃美歌のクラシック音楽ロマン派を代表する作曲家メンデルスゾーン（Jakob Ludwig Felix Mendelssohn Bartholdy, 1809-1847）が作曲した讃美歌について分析し、歌詞について聖書の箇所を通していくつかの例を挙げながら考察する。

メンデルスゾーンの作曲する楽曲は、これまで彼の恵まれた環境で生まれ育ったことから、「深みがない」などと低評価されることが多かった。しかし、音楽的意義の側面からメンデルスゾーンの生きた足跡を辿ると、幼少時代から第一級とされる教師たちから語学、数学、絵画、そしてもちろん音楽を学びそのどれをとっても人並み外れた才能を開花させていた。時に「モーツァルト（Wolfgang Amadeus Mozart, 1756-1791）の再来」などと言われたくらいであった。

メンデルスゾーンの作品を音楽史に則って振り返ると、ピアノ作品（ソナタ、前奏曲とフーガ、無言歌、幻想曲、練習曲、変奏曲）の作曲から始まり、交響曲、管弦楽曲、管弦楽つき独奏曲、オラトリオというように段階を経て作曲の幅を広げていった。38年という短い人生であったが、実に750曲という多くの作品を世に残した。また前論文「宗教歌の原語演奏について～ドイツにおけるM.ルターの宗教改革と音楽から～ Über die ursprüngliche Sprachaufführung von religiösen Liedern ~ von M.Luthere religiöser Reform und Musik in Deutschland～」(ガハプカ, 2017) に挙げたように、今でこそ「音楽の祖」と言われるJ.S.バッハ（Johann Sebastian Bach, 1685-1750）の音楽の素晴ら

しさを世に知らしめたのは、メンデルスゾーンの偉業の一つでもある。彼は38年という短い人生の中で多くのことを成し遂げたにも関わらず、その他の作曲家と比較すると正当に評価されていないように感じるのはなぜなのか考えていきたい。

メンデルスゾーンは他のクラシック作曲家に比べて恵まれた環境で育った。しかし一方では、生前に人種差別に悩まされた。1819年に発生したユダヤ人を排除する運動がいきよいよ当時メンデルスゾーンの一家が住んでいたベルリンにも到達し、まだ幼かった彼は姉のファニー（Fanny Mendelssohn-Hensel, 1805-1847）と共に苛酷な逆風と闘った。また、この当時の音楽界は、死後もメンデルスゾーンから音楽的影響を受け、過分に恩恵も受けていたにもかかわらず1950年に『音楽新報』<sup>1)</sup>に「メンデルスゾーンはユダヤ人一家をライプツィヒに連れてきてここをユダヤ人の都にしてしまった」、「メンデルスゾーンの作品には心の奥底に訴えかけるものも、高い精神性も感じられない。彼のようなユダヤ人には真の創作力がかけており、他人の作品を盗むだけだ」などと酷評した。

メンデルスゾーンを排除しようという動きはナチス台頭時代を背景に一層強まり、1934年ついには、ドイツの音楽の教科書からメンデルスゾーンの名前が削除され、その後12年間もの間作品の演奏および出版のすべてが禁止された。

様々な思惑で歴史的抹消の憂き目に遭いながらも、今日ではメンデルスゾーンが音楽監督を務め、この世で初めて「指揮者」の立場を確立したゲヴァントハウス管弦楽団<sup>2)</sup>や音楽学者達の働きもあり、メンデルスゾーン本来の音楽へ目を向けられるようになってきている。

本論文では、そのような境遇にあったメンデルスゾーンのクラシック作曲家としての活躍と、祖父の機転で改宗したキリスト教への想いを音楽と聖書の言葉の読み取りを通して分析し、宗教歌の演奏をすることへ繋げ、実際に演奏をすることを目的とする。

## I. メンデルスゾーンの讃美歌

メンデルスゾーンの作曲した曲は、日本基督教団の出版している『讃美歌』に、6曲載せられている。2番－礼拝・讃美、30番－礼拝・朝、98番－神・降誕、190番－神・聖書、314番－信仰の生活・祈祷、406番－信仰の生活・送別旅行というように讃美歌として歌唱されるであろう場面も多岐に渡っている。

本論で扱う讃美歌は、30番（詩編59・16、139・18、創世記1・5、ヨハネの黙示録4・2）と98番（ルカ2・8-14、イザヤ書9・2、ガラテヤ人への手紙4・4）の2曲である。また、併せてメンデルスゾーン自身が題目にも「讃歌」と記した、交響曲第2番の構成と歌詞について述べ、メンデルスゾーンの音楽が讃美歌でどのような役割を果たしているか考察したい。

### I-1 讃美歌の歌詞と歌詞使用された聖書の箇所

讃美歌30番<sup>3)</sup>：通常礼拝で朝歌われる。

歌詞

1. あさかぜしずかにふきて、  
小鳥もめさむるとき、  
きよけき朝よりきよく  
うかぶは神のおもい。
2. ゆかしき神のおもいに  
とけゆくわがころは、  
つゆけき朝のいぶきに  
いきづく野べの花か。
3. かがやくとこ世のあした、  
わがたまめさむるとき、  
この世の朝よりきよく  
あおぎみん神のみかお。

歌詞に使用された聖書の箇所

しかし、わたしはあなたのみ力をうたい、  
朝には声をあげてみいつくしみをうたいます。  
あなたはわたしの悩みの日にわがたかきやぐらとなり、  
わたしの避け所となられたからです。

詩篇第59篇第16節

わたしがこれを数えようとすれば、  
その数は砂よりも多い。  
わたしが目ざめるとき、  
わたしはなおあなたと共にいます。

詩篇第139編第18節

神は光を昼と名づけ、やみを夜と名づけられた。  
夕となり、また朝となった。第一日である。

創世記第1章第5節

すると、たちまち、わたしは御霊に感じた。  
見よ、御座が天に設けられており、  
その御座にいますかたがあった。

ヨハネの黙示録第4章第2節

讚美歌98番 神の降誕に関する礼拝で歌われる  
歌詞

1. 「あめにはさかえ み神にあれや、  
つちにはやすき 人にあれや」と  
みつかいたちの たたうる歌を

- ききてもろびと 共によろこび、  
今ぞうまれし 君をたたえよ
2. さだめたまいし 救いのときに、  
かみのみくらを はなれて降り  
いやしき賤の 処女にやどり  
世びとのなかに 住むべき為に  
いまぞ生まれし 君をたたえよ。
3. あさ日のごとく かがやき昇り  
みひかりをもて 暗きを照らし  
つちよりいでし 人をいかしめ、  
つきぬいのちを 与うるために  
いまぞ生まれし 君をたたえよ。

#### 歌詞に使用された聖書の箇所

暗やみの中に歩んでいた民は大いなる光を見た。

暗黒の地に住んでいた人々の上に光は照った。

#### イザヤ書第9章第2節

さて、この地方で羊飼たちが夜、野宿をしながら羊の群れの番をしていた。すると主の御使いが現れ、主の栄光が彼らをめぐり照らしたので、彼らは非常に恐れた。御使いは行った。「恐れるな、見よ、すべての民に与えられる大きな喜びをあなた方に伝える。今日ダビデの町にあなた方のために救主がお生まれになった。この方こそ主なるキリストである。あなた方は、幼子が布にくるまって飼葉おけの中に寝かしてあるのを見るであろう。それが、あなた方に与えられるしるしである」。するとたちまち、おびただしい天の軍勢が現れ、御使いと一緒に神をさんびしていった、「いと高きところでは、神に栄光があるように、地の上では、み心にかなう人々に平和がある

ように」

ルカの福音書第2章第8-14節

しかし、時の満ちるに及んで、神は御子を女から生まれさせ、律法の下に生まれさせて、おつかわしになった。

ガラテヤ人への手紙第4章第4節

讃美歌98番：もともとは89番「栄光とわに 王なる御子に」であったが、採用歌集番号改訂によって98番と改められた。歌詞はチャールズ・ウェスレーの作に、ジョージ・ホイットフィールドが手を加えたもので、曲はフェリックス・メンデルスゾーンの（作曲者自身は宗教曲に向かないとしていた）「祝典歌」の一部をW・H・カミングスが採用し、この讃美歌は世界的に広まった。真の神であり、真の人であるキリストによる神と人との和解を歌っている。

イザヤ書第9章第2節、ルカの福音書第2章第8-14節、ガラテヤ人への手紙第4章第4節が歌詞には用いられている。

## I-2 メンデルスゾーン交響曲第2番（讃歌）

交響曲は管弦楽のための音楽で、通常は4楽章からなり、ソナタ形式で書かれた楽曲を言う。メンデルスゾーンの交響曲はその副題からもわかるように、讃美歌とのつながりが最も深いとされる。本来管弦楽のために書かれた曲であることを考えると、全10曲の内第1曲は管弦楽での語源でもある〈シンフォニア〉であり、それ以外の9曲のすべての楽章で歌唱が付されている。

そのため、本交響曲は、ライブツィッヒでの初演時、「合唱とオーケストラのための交響曲」と呼ばれたくらいである。また、メンデルスゾーン自身も英国での初演に向けて、「交響曲というタイトルは英語では省かねばならない」とも述べていた。

現在は様々な検討を経て「新しいジャンルの音楽」として「交響曲カンター

タ」と名前を変えている。

まず以下に曲の概要を述べる。

曲目は、《讃歌 聖書の言葉による交響曲カンタータ》作品52 (Lobgesang Eine Symphonie-Kantate nach Worten der Heiligen Schrift op. 52) 1840年から1841年に作曲。

初演：初稿による初演1840年6月25日 ドイツ・ライプツィヒ、聖トーマス教会

改訂稿による初演1840年12月3日 ドイツ・ライプツィヒ、ゲバントハウス

楽章構成：

第1曲：シンフォニア

第2曲：すべてのもの、息あるものよ（合唱、ソプラノ独唱）

第3曲：レチタティーヴォ：語りなさい、救われたひとたち（テノール独唱）

第4曲：語りなさい、救われたひとたち（合唱）

第5曲：私は主を待ち焦がれました（ソプラノ独唱、合唱）

第6曲：死の綱がわたしたちを取り巻いた（テノール独唱）

第7曲：夜は過ぎ去った（合唱）

第8曲：さあ、感謝しましょう（コラール）

第9曲：それゆえ私は歌います（テノール、ソプラノ独唱）

第10曲：あなたたち諸々の民よ（終曲合唱）

楽器編成：Fl:2; Ob:2; Cl:2; Fg:2; Hr:4; Tp:2; Tb:3; Timp; Str:

Org.: (第2部のみ); Sop:2; Ten:1; Chor

全体の解説：交響曲第2番『讃歌』は、1840年6月のゲーテンベルク聖書400年記念祭のためにライプツィヒ市からの委嘱を受けて作曲された「交響曲カンタータ」である。メンデルスゾーンは、イタリア、スコットランドなどの交響曲と並んで、数多くの優れた声楽、合唱作品を残しており、この曲でその両者の融合を果たした。

全体は10曲で構成され、第1曲が器楽交響曲の第1～3楽章に相当するシン

フォニア、第2曲以降が声楽を加えたカンタータ部で、作曲者は第6曲が「全体の中心となる」としている。また、冒頭にトロンボーンが特徴的なモットー動機を奏でるが、メンデルスゾーンが「すべての曲は、声楽曲も器楽曲も『すべての息あるものよ、主をほめ讃えなさい』という言葉に作曲されている」と言う通り、この動機によって全曲が統一されている。

## II 歌詞と聖書の言葉

宗教歌の歌詞は、そのほとんどが聖書の言葉の中から編集されたものである。前論文<sup>4)</sup>にも示したように、元々は牧師や神父のみが聖書の言葉を理解していたが、時代が変わり一般市民も自分たちの言語で聖書を読めるようになった。しかし読めるようになることと、理解をして語り継いでいくことは直結するものではないため、口ずさみやすい旋律のついている「讃美歌」を普及させることに力を入れた。そこで聖書の物語の流れをつかみやすくするために様々な福音書を使い「讃美歌」の歌詞とした。

### II-1 讃美歌の歌詞と聖書の言葉

まず讃美歌30番から述べていきたい。この讃美歌は、前述のように通常礼拝の朝歌われるものである。「朝」をキーワードに歌詞を見てみると、1番に2回、2番に1回、3番に1回合計4回も出現している。また、「朝-あさ」の言葉の高低は、「あ」=高⇒「さ」=低であるので、讃美歌の旋律も「あさ」という歌詞が歌われる箇所は「あ」より「さ」に低い音が付されている。

次に聖書の言葉と歌詞に着目すると、本讃美歌の歌詞は聖書の4つの箇所から作られている。

日本で使用されている讃美歌<sup>5)</sup>には一番中心となった箇所1か所のみが載せられているが、ドイツの讃美歌<sup>6)</sup>を調べると、前述の4か所から考えられたことがわかる。

以下に讃美歌の歌詞のどのような聖書の言葉が中心となって作詞されたかを

考えるために、各箇所をまとめを示す。

- ①詩篇第59編第16節には、〔悩みから守ってくださる神へ、朝に声をあげてそのいつくしみをうたう〕
- ②詩篇第139編18節には、〔どのような時も神が自分と共にいる〕
- ③創世記第1章第5節には〔光を昼、やみを夜そして次の夜明けを「朝」と名付けた第一日目〕
- ④ヨハネの黙示録第4章第2節には、〔天の御座に居る神を感じた〕

聖書の4つの箇所のうち③創世記で初めて朝、昼、夜という時間の経過を神がはっきりさせたことを歌うことを中心としながら、①、②の詩篇と④のヨハネの黙示録の持つ意味を絶妙に盛り込んだ大変わかりやすい歌詞になっている。

次に讃美歌98番について述べる。この讃美歌は、神の降誕に関する礼拝内で歌われるとしており、キーワードは「たたえる」である。キーワードを中心に歌詞を見てみると、1番に2回、2番に1回、3番に1回出現する。また、98番全体の旋律の流れを見てみると、4分の4拍子のリズムに四分音符で奏され「たたえる」という言葉にふさわしく力強さを感じ、聴いている者も、奏している者も勇気がわいてくるような手法が用いられている。

聖書の言葉と歌詞に着目すると、本讃美歌の歌詞は聖書の3つの箇所から作られている。日本の讃美歌<sup>7)</sup>には30番と同じく、1か所のみが載せられている。

- ①イザヤ書第9章2節には〔暗闇に迷っていた人々の上に光が照った。〕
- ②ルカの福音書第2章8-14節〔野宿をしている羊飼いの前に主の使いが現れ、「ダビデの町の民を救わんとする救い主」の誕生を伝える。キリスト誕生を伝え、神を賛美する。〕
- ③ガラテア人への手紙第4章4節〔イエスは、神が律法の下に遣わした子である。〕

3つの箇所の内、②のルカの福音書第2章8-14節を日本の讃美歌では載せてあるが、例えば、2番の歌詞には③のガラテア人への手紙の言葉が「世人のなかに 住むべき為に」など入っており、降誕の重要な場面上手く表現していると言えるであろう。

また、前述のように、もともと作曲者のメンデルスゾーンはこの曲は「祝典歌」であるため、讃美歌には向かないと言っていたが、敬虔なキリスト教徒であったメンデルスゾーンが作り出した音が基となり、世界中に広まるような「降誕」を歌う讃美歌が生まれた。

## Ⅱ－２ 交響曲と言葉

各曲の詳細を以下に述べるが、前述のように、本稿では、歌詞に着目をして述べているため、第2曲から第10曲の歌詞が付された曲のみを通してその関係性を述べたい。また、歌詞は、M. ルター（Martin Luther, 1483-1546）の訳したドイツ語の旧約聖書<sup>8)</sup>によるが、メンデルスゾーンにより、順番などを入れ替える改編も加えており彼の信仰心が垣間見える作品でもある。

第2曲：すべてのもの、息あるものよ

Alles, was Odem hat, lobe den Herrn.      すべてのもの、息あるものよ、ほめ讃えよ、主を。

Halleluja, lobe den Herrn.      ハレルヤ、ほめ讃えよ、主を。

（詩篇150:6）

Lobt den Herrn mit Saitenspiel,      ほめ讃えよ、主を、弦を奏でて、  
lobt ihn mit eurem Liede.      ほめ讃えよ、あの方を、あなたたちの歌で。

（詩篇33:2）

Und alles Fleisch lobe seinen heiligen Namen.      そしてすべての肉あるものはほめ讃えよ、  
その聖なる名を。

（詩篇145:21）

Lobe den Herrn, meine Seele,      ほめ讃えよ、主を、わが魂よ、  
und was in mir ist, seinen heiligen Namen.      そして私の内にあるものよ、その聖なる名を。  
Lobe den Herrn, meine Seele,      ほめ讃えよ、主を、わが魂よ、  
und vergiß es nicht, was er dir Gutes getan.      そして忘れないように、あの方があなたに

もたらした恵みを。

(詩篇103:1-2)

第1曲のシンフォニアⅢ中間部の符点リズムと同様のモットー動機が管楽器に順次登場する。そして、次第に力強く合唱が「すべてのもの、息あるものよ」を歌い始める。その後も合唱を加えモットー動機を披露した後、Allegro di moltoで「ほめ讃えよ、主を、弦を奏でて」のフーガが展開される。順次進行で三度上昇して分散和音でまた上昇するこの生氣溢れるテーマは、シンフォニアⅠの第2主題の裏返しになっており、ここで用いられる歌詞「ほめ讃えよ、主を、弦を奏でて、ほめ讃えよ、あの方を、あなたたちの歌で」は、これまで管弦楽だけで演奏してきた交響曲に歌唱を導入し、新しい音楽を作るという手法を生み出したことをメンデルスゾーンは効果的に表現している。その後は、ト短調で「そしてすべての肉あるものはほめ讃えよ」という歌詞で新たなテーマを作っている。

その後は、前述の2つのテーマが重なって二重フーガとなり、管弦楽と合唱の煌びやかな饗宴が奏でられ、テンポを落として効果的にソプラノ独唱が「ほめ讃えよ、主を、わが魂よ」を歌い始める。本主題は、「弦を奏でて」のテーマの反行型となっており、シンフォニアⅠの第2主題（あるいはⅢの冒頭主題）の前後を入れ替えた形でもあることに注目せねばならない。

独唱と合唱が交互に誉め歌をうたう裏で、伴奏は16分音符をポルタートで柔らかに刻み続け、歌詞に寄り添った主へのあたたかな想いを歌唱とオーケストラの両面から奏でている。

第3曲：レチタティーヴォ：語れ、救われたひとたち

Saget es, die ihr erlöst seid durch den Herrn,	語れ、主のおかげで、救われた者たち、
die er aus der Not errettet hat,	あの方が苦難から解き放った者たち、
aus schwerer Trübsal, aus Schmach und Banden,	重苦しい苦悩から、屈辱と桎梏から、

die ihr gefangen im Dunkel waret,	闇に捕らえられていたひとたち、
alle, die er erlöst hat aus der Not.	すべての、あの方が苦難から救った者たち。
Saget es! Danket ihm und rühmet seine Güte!	語れ！感謝せよ主に、
	そして褒めたたえよ、その慈愛を！

(詩篇107)

Er zählet unsre Tränen in der Zeit der Not,	あなたはわたしのさすらいを数えられました。
	わたしの涙をあなたの皮袋にたくわえてください。
er tröstet die Betrübten mit seinem Wort.	あなたの約束はわたしを生かすので、
	わが悩みの時の慰めです。

(詩篇56:8/119:50)

第3曲では大きく雰囲気が変わって、テノール独唱の憂いに満ちたレチタティーヴォが、「語りなさい」と四度の下降跳躍で始まる。これが徐々に順次進行の下降音形となって行き、「讃えなさい、その慈愛を」でハ音から四度の階段を下った後、さらに半音下降する手法を用いさらにその憂いを演出している。

次の Allegro moderato になって流れる分散和音の伴奏になると、四度音程を順次下降する主題がはっきり意識できる。「涙を」(Tränen)からの下降は「時」(Zeit)で半音下がっており、レチタティーヴォ部の最後と同じ音階であり、Tränen が符点リズムとなって、「悲しみを」のようにアウフタクトから跳躍して順次下降する音型となり、頂点では六度の跳躍を用いている。最後に「語りなさい！感謝しなさい あの方に」を四度の下降跳躍でとぎれとぎれに歌い、そのまま第4曲へと導かれる。

第4曲：語りなさい、救われたひとたち

Sagt es, die ihr erlöst seid	語れ、救われた者よ
von dem Herrn aus aller Trübsal.	主によって、すべての苦悩から救われた者よ。
Er zählet unsere Tränen.	かれは私たちの涙を数えている。

(詩篇107/56)

第4曲は、哀いと感謝の歌は合唱である。第3曲と少し雰囲気似ているが、分散和音の伴奏はシンフォニアIの展開部を思わせる三連符になり、静かな情熱が心の中で燃えているようでもある。旋律線は、主音から五度上昇し、第4曲と同じ四度の順次下降で導音に移る。主題はすこしずつ姿を変えながら幅を広げて行き、ついにはト音を1オクターブ下降する。その旋律を木管楽器で静かに反復すると、再び休みなく第5曲につながる。

第5曲：私は主を待ち焦がれました

Ich harrete des Herrn, und er neigte sich zu mir und hörte mein Flehn.

主はわたしを滅びの穴から、泥の沼からひきあげた。

Wohl dem, der seine Hoffnung setzt auf den Herrn!

わが神よ、主よ、あなたのくすしきみわざ

Wohl dem, der seine Hoffnung setzt auf ihn! われらを思うみおもいは多い。

(詩篇40:2/5)

これまでは、変口長調、ト短調を基本として楽曲が進んできたが、第5曲では、変ホ長調を中心とし楽曲が進み、少しゆったりとした気分を演出する。また、ホルンのソロが入ることによって、牧歌的なゆったりした雰囲気を醸しだしている。ソプラノ独唱の Ich harrete des Herrn は、歌詞では「待ち焦がれる」という意味を歌唱するが、旋律が加わることによって、「憧れ」を表現するような音楽となっている。その後は、合唱が「幸いなるひとよ」を反復した後、ソプラノ独唱の二重唱によるカノン風の掛け合いが現れ、後半は独唱と合唱とが時折重なり、時折掛け合いをしながら「幸いなる」気持ちを表現する。

第6曲：死の綱がわたしたちを取り巻いた

Stricke des Todes hatten uns umfängen, 死の綱がわたしを取り巻き

und Angst der Hölle hatte uns getroffen, 陰府の苦しみが私を捕らえた。

wir wandelten in Finsternis.

わたしは悩みと悲しみにあった。

(詩篇116:3)

Er aber spricht: Wache auf der du schläfst,

眠っている者よ 起きなさい。

stehe auf von den Toten, ich will dich erleuchten.

死人の中から立ち上がりなさい。

(そうすれば、キリストはあなたを照らすであろう。)

(エフェソス5:14)

Wir riefen in der Finsternis:

セイルからわたしに呼ばれる者がある、

Hüter, ist die Nacht bald hin?

夜回りよ、今夜のなんどきですか？

Der Hüter aber sprach:

夜回りは言う、

Wenn der Morgen schon kommt, so wird es doch Nacht sein;

「朝がきます、夜もまたきます。

wenn ihr schon fraget, so werdet ihr doch wiederkommen und wieder fragen:

もしあなた方が聞こうと思うならば聞き

なさい、

Hüter, ist die Nacht bald hin?

また来なさい」。

(イザヤ21:11-12)

第6曲は歌詞に関して言うと、聖書の箇所がこれまでの「詩編」から「エフェソス」に移る曲でもあり、また、本交響曲の中心になる曲であるハ短調の三拍子で、これまでのあたたかでゆるやかな雰囲気から一転し、厳しい雰囲気へと変化がつけられている曲でもある。序奏は、テノール独唱の「死の綱がわたしたちを取り巻いた」を予感するように、半音階的に上昇する音程が奏でられ不吉な予感を演出している。その後歌詞が「エフェソス第5章」へ変わると、「私があるあなたを明るく照らそう！」の箇所で大イ長調のカデンツで闇に光が射すような表現が現れ、再び「詩篇」の「死の綱が」で厳しい音楽が舞い戻ってくる。その後は、もう一度「エフェソス第5章」を、調もハ長調へ転調、ようやく見えていた希望は、嵐のようなアレグロの音楽にかき消されてしまう。というような構成となっている。

第7曲：夜は過ぎ去った

Die Nacht ist vergangen, der Tag aber herbei gekommen.

世はふけ、日が近づいている。

So laßt uns ablegen die Werke der Finsternis, それだから私たちは

und anlegen die Waffen des Lichts, やみのわざを捨てて

und ergreifen die Waffen des Lichts. そして光の武具を着けようではないか。

(ローマ13:12)

第7曲では、第6曲に対して、「夜はまもなく明けるのでしょうか？」の問いが緊迫した間で遮られると、旋律を長調に転じてソプラノ独唱が「夜は過ぎ去りました」と答えることによって始まる。第6曲の闇が晴れることから、“光の凱歌”と呼ばれている。天からの光が下りてくることから二長調が使用されている。金管の演奏から男声が歌い、その後女声合唱が「夜は過ぎ去り」を高らかに歌う。この主題も、第6曲の主題を介してモットー動機につながっている。

第8曲：さあ、感謝しましょう

Nun danket alle Gott

さあ、感謝しましょう、皆で神に

mit Herzen, Mund und Händen,

心と口と手をもって、

der sich in aller Not

その神はあらゆる苦難においても

will gnädig zu uns wenden,

恵み深く私たちの方に向いてくれるのです、

der so viel Gutes tut,

その神はかくも多くの恵みをもたらします、

von Kindesbeinen an

幼少の頃から

uns hielt in seiner Hut,

私たちをその保護のもとに置き、

und allen wohlgetan.

そしてすべてのものに慈しみを与えてきました。

Lob, Ehr und Preis sei Gott,

称賛、誉れ、そして賛美が神にあらんことを、

dem Vater und dem Sohne

父に、そして子に

und seinem heiligen Geist

そしてその聖なる精霊に

im höchsten Himmelsthronen.  
Lob dem dreiein'gen Gott,  
der Nacht und Dunkel schied  
von Licht und Morgenrot,  
ihm danket unser Lied.

いと高き天の玉座において。  
称賛が、三位一体の神に、  
その神は夜と闇を隔てました  
光と曙から、  
あの方に感謝を、私たちの歌で。

(コラール)

第7曲の熱気を冷ますかのように静謐なト長調に転じ、第8曲が始まる。ルター派の有名なコラールを、前半は管弦楽のないア・カペラで、後半は管弦楽の柔らかな分散和音を伴って厳粛に奏される。

第9曲：それゆえ私は歌います

Drum sing ich mit meinem Liede ewig dein Lob, du treuer Gott!

それゆえ私は歌います、私の歌で永遠に、  
あなたの称賛を、信実なる神よ！

und danke dir für alles Gute, das du an mir getan.

そしてあなたに感謝します、すべての恵  
みに、あなたが私にもたらしてくれた。

Und wandl' ich in Nacht und tiefem Dunkel,  
und die Feinde umher stellen mir nach,  
so rufe ich an den Namen des Herrn,  
und er errettet mich nach seiner Güte.

そして私はさまよう、夜と深い闇の中を、  
そして敵があちこちで私を追いかける、  
そこで私は主の名を呼びかけ、  
そしてあの方は私を救い出すのです、  
その慈愛によって。

(詩篇138)

室内楽的な伴奏にのって、テノール独唱が永遠の賛美を歌う。第3曲の後半部と多くの共通点を持つ主題が、ト短調のドミナントで始まって変口長調のトニカに収まるという、不思議な調性感があり、歌詞の通りの単純な讃歌ではなく、神への賛美を歌うことにより、心の不安を拭い去ろうとしているかのよう

である。

上昇音は順次進行から広い跳躍に変わって、「そして私はさまよう」で歌がソプラノ独唱に移ると、調は二短調に転じ、「闇のなかで敵に追われる」という不安な気持ちをはっきりと前面に出される。その後は、緊張が高まってテノールとソプラノの重唱が「そこで私は主の名を呼びかけ」と叫ぶと、穏やかなへ長調に解決して「そしてあの方は私を救い出すのです、その慈愛によって」優しい表現と転じる。その後は「追われ」救いを求めるような重唱が続き、もう一度「その慈愛によって」と歌う箇所には変口短調で表され不安を隠しきれない迷いの表現で書かれ、救いを核心する曲の締めくくりは喜びに満ち溢れた重唱で優しく奏でられる。

第10曲：あなたたち諸々の民よ

Ihr Völker! bringet her dem Herrn Ehre und Macht!

あなたたち諸々の民よ！来たらせなさい、  
主に誉れと力を！

Ihr Könige! bringet her dem Herrn Ehre und Macht!

あなたたち諸々の王よ！来たらせなさい、  
主に誉れと力を！

Der Himmel bringe her dem Herrn Ehre und Macht!

天空よ、来たらせなさい、主に誉れと力を！

Die Erde bringe her dem Herrn Ehre und Macht!

大地よ、来たらせなさい、主に誉れと力を！

(詩篇96)

Alles danke dem Herrn!

すべてのものは感謝しなさい、主に！

Danket dem Herrn und rühmt seinen Namen

感謝しなさい、主に、そして讃えなさい、  
その名を

und preiset seine Herrlichkeit!

(歴代誌上16)

Alles, was Odem hat, lobe den Herrn,

Halleluja, lobe den Herrn!

(詩篇150:6)

そして賛美しなさい、その光栄を！

すべてのもの、息あるものよ、ほめ讃え  
なさい、主を、

ハレルヤ、ほめ讃えなさい、主を！

「主に誉れと力を来たらせなさい」という終曲は力強い合唱で始まる。合唱のパートがそれぞれに呼びかける役割を担っており、それらがフーガ風に構成され歌われる。バスパートは諸々の民にテノールパートは諸国王に、アルトパートは天に、ソプラノパートは大地に呼びかける。

讃歌の終曲は神をたたえる賛美の歌が多いが、ここでの主題は厳しい感じの強いト短調が使われ、更に、不安定さを演出するかのようには和音の転回が用いられている。

われわれ人間は神への賛美を忘れてしまっではいけない、神を畏れなさいという警鐘でもあるのかもしれない。一方では、すべてがその個（4つのパートの使命）を大切に与えられた使命を果たすことにより見えてくる「光」があることも示唆している。

その後「すべてのものは感謝しなさい」は変口短調となり、第2曲の導入部に対応している。また、管弦楽器の動きと感謝を表す言葉に付されたりリズムからは軽やかな印象に変化する。その後、ハ長調へ移行すると、落ち着いたあるバスの声で「感謝しなさい、主に」がフーガとして現れると、100小節にわたって展開する。

終曲にふさわしく圧倒的な音の力を感じさせる合唱と合奏とで輝かしく賛美の歌が閉じられる。

### Ⅲ. まとめ

宗教歌を演奏するにあたり、奏者としてどのように楽曲を解釈し、言葉を読

み取っていくべきかを検討した。

今回中心として着目した作曲家メンデルスゾーンは、「はじめに」で述べたように、様々な歴史的偉業を成し遂げた人物である。しかしそれらが正当に評価されなかったのは、メンデルスゾーンがユダヤ人であったということがまず挙げられるが、何度も作曲家として排除されながらも現在において、メンデルスゾーンの名がこのように残っているということは興味深い。

それはやはり、38年という短い生涯であったにも関わらず、多くの優れた作品を残していたからこそこのようにメンデルスゾーンの評価が正当になされるようになったのであろう。

また、メンデルスゾーンの作品は、賛美に関する歌のみならず、深い愛情に満ち溢れた作品が多くあることが明確になってきたからであろう。

このように、演奏するにあたり楽譜や詩から読み取れるものと、歴史的背景や作曲家の人生そのものに関して音楽を通して迫ることで、演奏をする際の細かな声色への工夫や、観衆を捕らえる目線、あるいは会場全体の雰囲気などへも心を配り演奏していくことが可能となるであろう。

今回は、讃美歌に付された歌詞、交響曲カンタータに付された歌詞と聖書の言葉に着目して述べたが、今後はさらに音楽的な分析にも研究を広げ、より作曲家の想いを表現できる歌唱を追求していきたい。

## 註

- 1) メンデルスゾーンと音楽的才能を認め合っていたシューマン (Robert Alexander Schumann, 1810年6月8日-1856年7月29日) が創刊していた雑誌。
- 2) ゲヴァントハウス管弦楽団：1743年、世界初の市民階級による自主経営オーケストラとして発足。それまでの宮廷専属（歌劇場含む）オーケストラと異なり、このオーケストラの誕生で、自らの城や宮殿などを「演奏会場」として音楽を聞いていた王侯貴族のような身分・階級でなくとも、入場料さえ払えば誰でもオーケストラ演奏を聞けるようになった。1835年、メンデルスゾーンがゲヴァントハウス・カペルマイスターになると、技術的にも、そして楽員の年金制度創設など待遇面でもより基盤が固まり大きく飛躍することになった。ベートーヴェン・シューベルト・メンデルスゾーン・シューマン・ブラームス・ブルツ

クナーをはじめ、多くの作曲家の作品を初演してきたことでも知られる。

- 3) 日本基督教団讃美歌委員会編集「讃美歌」日本基督教団出版局 1991
- 4) ガハブカ奈美「宗教歌の原語演奏について～ドイツにおける M. ルターの宗教改革と音楽から～」京都女子大学宗教・文化研究所研究紀要 2017
- 5) 日本基督教団讃美歌委員会編集「讃美歌」日本基督教団出版局 1991
- 6) 「Evangelisches Gesangbuch」2011
- 7) 日本基督教団讃美歌委員会編集「讃美歌」日本基督教団出版局 1991
- 8) ガハブカ奈美「宗教歌の原語演奏について～ドイツにおける M. ルターの宗教改革と音楽から～」京都女子大学宗教・文化研究所研究紀要 2017 参照

### 参考文献

- ・石原謙「キリスト教の展開—ヨーロッパ・キリスト教史下巻—」岩波書店 1972
- ・魚木忠一“後偏 プロテスタント基督教思想史”「基督教思想史」教文館 1951
- ・ガハブカ奈美「宗教歌の原語演奏について～ドイツにおける M. ルターの宗教改革と音楽から～」京都女子大学宗教・文化研究所研究紀要 2017
- ・作野理恵「Felix Mendelssohn-Bartholdy 音楽の音楽史的意義」一人種、宗教、教養から生み出された作品による一考察— プール学院大学研究紀要 51, 2011
- ・中野京子著『芸術家たちの秘めた恋』—メンデルスゾーン、アンデルセンとその時代 集英社文庫 2011
- ・フェリックス・メンデルスゾーン・バルトルディ基金編集『フェリックス・メンデルスゾーン・バルトルディとその魅力』聖公会出版 2006
- ・星野宏美「メンデルスゾーンと日本」—原典資料の内容と来歴を通して— 立教大学ことば・文化・コミュニケーション：異文化コミュニケーション学部紀要 3, 2011
- ・山折哲雄・長田俊樹編『日本人はキリスト教をどのように受容したか』国際日本文化研究センター 1998年
- ・Mendelssohn -Lobesang Op. 52 Partitur Breitkopf & Härtel
- ・『聖書』新約聖書 1954 旧約聖書 1955 日本聖書協会 1986
- ・日本基督教団讃美歌委員会編集「讃美歌」日本基督教団出版局 1991
- ・Evangelisches Gesangbuch」2011
- ・Prof.Dr.V. HAMP, Prof.Dr.M.STENZEL, Prof.Dr.J.KÜRZINGER 『DIE HEILIGE SCHRIFT der Alten und Neuen Testamentes』1962

### <キーワード>

讃美歌 メンデルスゾーン 宗教歌